風見

東京経済大学
ヨット部

目次

一、はじめに……3頁
二、ヨット部の沿革……5
三、部の近況……7
四、OB並びに現役のたより……11
五、編集後記……25

部長　教授　大竹　勝

ストックホルムの効外に、グランドホテルというのがあって、その近所のアパートに二日ばかり滞在したので、ホテルや、その清楚な庭園や裏手にあるヨットハーバーなどを盛んにカメラに収めた。昭和四十三年八月中旬のことである。

あとで、そのホテルがイギリスの作家グレアム・グリーンの小説「イギリスに生れて」の舞台になっていることがわかって、そのカラーフィルムは私にとっては特に貴重なものになった。

二軒に一艘はヨットがあるといわれていて、さすがはヴイキングの国だと思った。言うなれば、ストックホルムの海の自転車みたいなものだということになる。

それで、この北方のヴェニスには入江が多いので、自動車で大迂回するかわり、櫂々と水の上を横切って目的地に行けるのである。

日本は海にかこまれた国でありながら、最近は、漁業に直接の関係のある人以外は、海に対して一般の関心が少ないようで、案外、である。

幸いにわがヨット部の男女部員は、このスポーツを学生時代に身につけているのであるから、将来社会人となって、スエーデンの海にヨットを走らせ、国際的交歓が出来る様な、そんな視野をもって頂きたいと思う。

主将　中野隆昭

我々のクラブも今年で創設以来、早、七年目を迎えました。これも部長、コーチ、並びに諸先輩方の御尽力のたまものと深く感謝しております。当クラブも、徐々に力を加え、物質的な面もようやく形が整い、OBの方々も二〇名を越すクラブとなった現在、現役との親密さを増す意味においても何らかの形で表わしたいと思い、ここに文集を作ることに決定し、それについて、我々部員一同が一丸となって作成したものが、この文集です。

この文集が末長く続くよう、OBの方々の貴重な体験、御意見、御感想、近況等をお寄せ頂いて、尚一層より良い文集にしたいと願っております。

44年度

三月　44年度初合宿
　　新入生勧誘

四月　新入部員入部(七人)
　　部創設以来初めての女子部員誕生。六月までに13人となる。

五月　関東インターカレッジ(於葉山森戸海岸)
　　S級；3艇　A級；3艇(内2艇横国大からチャーター)
　　成績；3部参加校15校中 総合14位

六月　役員改選(五期から六期へ)
　　主将：杉原克典　　学連：中野隆昭
　　会計：工藤純一　　マネージャー：小島孝行
　　Y-15を天野先輩より寄贈される

七月　強制アルバイト

八月　夏季合宿

九月　試験のため部活動休止

十月　関東個人戦参加．A級1艇　S級1艇

十一月　関東新人インターカレッジ参加　A級3艇　S級3艇
　　Season off に入る
　　ダンスパーティー開催(於大手町産経会館)
　　大成功に終わる

十二月

一月

二月　試験(四年生方の追い込みが始る)

三月　春休み強制アルバイト　四年生追い出しコンパ(七名)

45年度

三月　今ヨットシーズン幕明けのコーチング合宿
A級1艇を工学院大学より購入(1171)

四月　新入部員勧誘　努力の甲斐あり創設以来最高の
20人が入部（内女子部員2人）

五月　関東インターカレッジ（於葉山森戸海岸）
S級：3艇（内1艇を日大からチャーター）A級：3艇
成績；3部参加校18校中　総合17位

六月　役員改選（六期から七期へ）
主将：中野隆昭
副将・マネージャー：工藤純一
副将・学連　：小嶋孝行
会計：宮崎幸雄
合宿日数その他の諸問題がからんで1年生10人が退部

七月

八月　夏季合宿（18日間合宿）

九月　スナイプ新艇購入（1516．渡壁造船所より）

十月　関東個人戦参加　（於葉山森戸海岸）
ジンクスなのか例年のごとく強風下で1レースのみ
強行された。（S級1艇　A級1艇）

十一月　関東新人インターカレッジ参加（於葉山森戸海岸）
S級3艇　A級3艇（内1艇日大からチャーター）
成績；A級12校中10位　S級12校中12位
来季インカレの為の最終合宿
ヨット部文集の編集．強制アルバイト．部旗作成
Season off に入る

現在庫艇数：A級 1171，1250．1251（廃艇mark boat），1263
S級 1374，1471．1516，10671
Y-15

三、部の近況

主将　中野隆昭

時恰も激しく揺れ動く一九七〇年の初年度、当校創立又七〇周年、我ヨット部もこに創設七年という意義深い年を迎え、OB並びに現役のヨットに対する情熱が実り部旗を制定するまでに至り、艇もA級三艇S級四艇、マークボート一艇、Y15一艇と有し、部員数も常時二十数名を持ち、OBの方々も二十数名という立派なクラブにまで成長し、ようやく躍進の車輪は動き出しました。

クラブの抱負としては、来春までにはA級のレース艇を一艇購入し、物質的な面ではどの大学にも劣らないものとし、技術面に卓越し近い将来に優勝の栄冠を勝ち取るべく奮励努力する覚悟でいる次第です。

この新な抱負を主将として持てるという事は、何よりも部全員の団結の賜と声を大にして誇れるものであり、さらに関係諸も重方のいろいろな面での御協力で得られれば尚力強いものと確信します。

今後とも当クラブの発展のため温い御力添えを切望してやみません。

副将・主務　工藤純一

今年のクラブ活動は全員、事故もなく終わろうとしている現在、私はクラブに適切なる助言を言って下さったOBの方々に感謝いたします。

思えば四月に新入部員が二十名入り、春の合宿で夜寝る時は折り重なって寝ている状態でしたが今では十名に減ったものの、残っている者は気心のしれたやる気のある連中ばかりなので、かえって心強いです。

五月の中旬にはインカレが葉山森戸海岸で行なわれました。風はレース中吹いて最後の五レースは中止になりました。

成績は失格艇が多かった為不振でした。レースの結果が不振原因のひとつとして、部員が艇を乗りこなしていないのがあげられるので、夏には徹定的に艇を知る為に約二十日間(7/19～8/5)の合宿をしましたが、後半少しダレ気味になりかけましたが、無事に終りそしてスキッパー、クルー各個人が少しの自信が得たと思っています。

そして、春に失格艇が多かったため夜のミーティングではルールに重点をおきました。九月に一回合宿をやり十月の末に新人戦が行なわれました。レースは風に恵まれまして我クラブも連勝しました。その中で女子部員の中位に食いこんだのがひかっています。全レースを通じて我部の失格艇は二艇で、春よりはずっとよくなり成績が悪いながらも来年のインカレに一明の光を抱きました。

十一月には打ち上げ合宿を中旬に一回行ない帰る前日には晩秋の短かい日を利用して練習に回航してきました。そして、今年のセーリングに不練を残しながらも最後のセーリングを堪能してきました。

副将・学連　小嶋孝行

新期の常任委員に今迄になく二部三部の学校が選出された。即ち、二、三部の意見ともっと学連に反映させようという皆の考えである。

今学連は少しづつではあるが変わろうとしている。学連はどうあるべきか、もう一度よく考えてみようという空気が盛り上がっている。

総体的に見た学連のあり方は勿論、運営の方法をより良くしようという事である。これは個人戦運営の不手際を反省しての結果が大である。

それに加えてレース自体をもっとシビアーなものにしていこうという動きもある。その手始めとして新人戦から行なわれる事となったセールの計測がある。これは皆が思っている様に各チームに無駄な金銭的負担をかけるのではないかという疑問が残っている。その他艇の計測、それに付随するバラストの積載とまだまだ問題は多い。もう一つの大きな課題としては、新艇種選定という問題がある。ニルには新艇種委員会というのを設けてあるが、一応四人〇に内定との事でそれ以上にはあまり進展していない様である。A級デイングギーを他艇種に変えようという案はかなり以前からあった様だが、未だ実現していない。

運営の合理化の一環として早く決定される事を望む。

会計　宮崎幸雄

現在の状況を一言で言うならば「頭が痛い」である。原因は色々ありますが、先づ個人戦　新人インカレ参加に伴う大きな支出で、それが限界ぎりぎりのものであったことは先輩も理解しておられます。会計としても無駄な出費を避ける様努力していますが、皆も積極的に協力してもらいたいのが本音です。そして現在の多大の出費→部員、遠、担額、増→部員の滞納→部員への負担増、という悪循環を是正する良い方法を思いついたら是非提案して下さい。

個人戦・新人戦合宿の会計報告

収入金額	三三四、一二六
支出金額	三一九、〇六三
差引金額	一五、〇六三

コルから借金を返してゆかなければならず苦しい。会計状態もそんな状態なので滞納金はなるべく払って下さい。詳細は年度末の会計報告書で報告致します。

装備　装備一同

現在A級長谷川　S級富田　装備一般川島という三名で協力し合って当っております。次ぎであります。装備の仕事も広範にわたり、船外機管理、艇の管理、等に始まり、倉庫内の整備、整理整頓を常に気を配り、本年度からマストをベランダからつるなどと変った試み等もやりました。諸先輩方の残された備品等も永く残す様に大切に扱っております。又部員個人々にも愛着をもって管理に協力してもらっております。また、本年度は諸先輩の御協力をたまわり一同深く感謝しております。来季には工具、シート類、その他の艤装品を今以上に使い易い様にしたいと三人で考えて居ります。何卒今後共宜しく御願い致します。

副務　吉田三良

副務といっても現在特に目立った仕事もしていないのですが、今わずかながらもやっている仕事を三、三あげてみますと、合宿中に於るフトンの関係、食事当番の割当、

第をやっているわけですが、副務という役柄はそういうものだけに終っては いけないと反省しております。副務とは主務の助手であると共に、クラブ全体を統一し幸いに今私は学年が二年ですので、一、二年と三、四年の橋渡し的存在になれたらと思っております。今後このクラブにも種々の問題が起きてくると思いますが、重要ポストに置かれているという自覚をもって全力で問題に取りくんでいくつもりです。今後共よろしく御願いします。

気象係　永山俊郎

気象係といっても気象台に問い合わせをし、潮、日の出・入等を新聞から書きぬくのみという事しかせず、部員の皆に申し訳なく思っています。気象に関する勉強も部員一同となってやるべきと切に思っております。自然を相手のスポーツだけに部員一人々が雲の型、速さ、風、潮、等から天気の判断を出来る様心がけるべきだと思います。

O.B連絡係　五十嵐　誠

私がO.B連絡係という役職についた事は、非常にばし事であるはずなのに現実にはたいへん重荷と成っていると思いますが、私は自分勝手な所が非常に多いのも、責任感も十分には持ち合わせていない面を持った男であるという事ばかりです。そんなわけでO.Bの方々には、ときどかし、職務怠慢な奴と思われているはずで、ときどかし御迷惑をおかけしている事と反省している次第です。これを機に私も少しづつ直してゆきたいと思いますので、見捨てずに今後共よろしく御願いしたいと思います。

四、OB並びに現役のたより

ヨット部の想い出

天野広道（㊇年度卒）

俺は、好き勝手に部生活をやったと思う。先輩にたてをつき、部員とケンカをし、おまけに地校の奴等とケンカをやり、牙を向いたレース、そんなヨット生活だった。しかし、牙を向き出しながら、連帯感は強くなっていった。酒を通じて仲間が出来た事が、青春に於て最も素晴らしい事だった。永遠にロマンを探して行きたいと思う暖かい光を放ち、快い音を伝える。「海」。私は、お前にとりつかれてしまった。いつか知らぬ間に足は、お前のにおいをかぎとり、歩を進ませる。もう離れる事ができないであろう。海に恋した奴等は、陽気に煙草をくゆらし酒をくむ。ヨット乗りは陽気で夢を持った奴ばかり。いつの間にかそんな仲間になってしまった――。

杉原克典（前主将　四年）

一年間の主将の任を大過なく終えた事は羽草監督、並びに諸先輩と部員一同のおかげと深く感謝しております。この文集の序をかりまして深くお礼申し上げます。主将在任中は四年一人の為合宿中相談する者もなく、自問自答の毎日で自分ではでき得る限りの事はやりましたが致らなかった事も沢山あると思い残念でなりません。

四年間振り返ってみると、ボロ船救艇で強風時に出るとトラブルの連続、そしてコーキングの連続というクラブでレースにはチャーター艇はほとんどで、合宿所もなく荒崎から通うという苦しい時代を考えると随分と備って来たものだと思っています。

しかし苦しい中でもニュー・セールをおろしたり、新艇を造ると、何もない状態だから喜びは倍であったと思います。

これから後輩に望む事は、レースに勝つ事、これは私にできなかったものだけに諸君に成し遂げてもらいたい。

又、諸君が勝つことが諸先輩の苦労に報いるものだと思います。

しかし単に勝つだけでなくヨットや又クラブ活動そのものを通して、自分自身の成長の糧としてもらいたい。もちろん勉学の方もおろそかにせず社会人として恥ずかしくないものを身につけてほしいものだと思っています。

杉原克典（四年）

海は俺の恋人
荒波は俺を鍛えてくれる
波しぶきは俺の身を洗ってくれる
潮の臭いは俺を酔わせてくれる。

詩

まどろすの歌

阿部謙一（一年）

荒崎に来た。
マストのある風景と浪を蹴って走る漁船と、
どこへもう―。
外の行くところもありはしない。
はやくパケンコ屋のある林を曲がり、
遠く町にある灯台へ帰ってゆこう。
そうして忘却の鐘をとき、
記憶のだんだん消えてる森戸へ帰ってゆこう。

海

笠井清隆（一年）

若者だけやってこい。
海はいう。
若者に私の顔に
接吻させ
私の言う事をきかせよう。
私は最後の言葉
嵐と星々がどこから来るのか教えるもの。

和田明美（一年）

朝日のまぶしい
初秋の葉山に
何十ぱいものヨットが出艇する
きゃ壮烈なながめは
さながら
波に舞う蝶

風と潮の流れと波と……
自然だけがすべて

自然だけが味方であり
自然だけが敵になる

白い航跡を残して
快く海面をすべるスナイプ
セーラー杯に風をはらんで
激しくヒールするディンギー

そこには
計り知る事の出来ない
雄大な自然を相手に
人間の喜びが
戦いがある。

自然は
二度として同じ条件を作らない
黒い波がいつもつきまとう
それでも私の中の何かが呼びかけ
今日もまた
海にゆく。

一体誰が

黒川由利子（一年）

誰がわかるだろうか
紅くオレンジに燃える空
海はそれを何度にも反射して
金と銀とが絶えず動きあい
その中に小さな燈台と
ヨットがいつつ黒く浮き出される

ヒタヒタヒタと我が艇の
起る音だけしかない海を
スキッパーと二人きりで何の話もせず
風にまかせてポンドをめざす。

ジブを引くチモカが抜け
足にはさんではブームをおさえ
輪を描きながら飛んでゆく黒い鳥を追う。

誰に話したらわかるだろうか
幾重にも重なりあうしま模様の空と
互いにゆれ動く金色の波と
うつし出された小さな影絵

こんな素晴らしい夕暮れがあるということを
一体誰がわかるだろうか。

広田順（一年）

そこには潮の香がある
まっさおな海と空がある
輝く太陽がある
そして真白いセールがある

ジブを引きフェンダーにすわる
快い風が吹きすぎてゆく
木山が光ってまぶしい
タック　タック　タック……
海　水の様なしぶきが目にしみる

海　荒い海　大きな波
大きな波の間に
木の葉の様にもまれるヨット
オーバーセール
セーターがにぶく光　て
一瞬ヒヤリとする
足が痛い、

帰路

吉田三良（二年）

夕暮れの荒崎をヨットを駆ってポートへ
荒崎へ！　魚とコンブ、岩と松とそして
人間の匂いがする。
食堂のみそ汁の香りがする
晩秋の薫り
雨あがりのうすもやの中からかすかに
噴ぎあてた時のうれしさ、
どこまでもはてしなくつづけと思いながら
ラテイラーを握っていたのである。

青春

五十嵐誠（二年）

「若者たちよ、若いうちには楽しんでおけ
よ」と教えてくれた一般の人たちのま
まに、行動した私の愚さよ（悔わるとも
いまや遅し）

きみたちは[illegible]、そして言った
「青春は空に過ぎず、しかし愚かな者は
愚かな事しかしていない」

波と砂の想い出

長谷川康二（三年）

波に光る砂つぶの
輝きにも似てる君の微笑
今も残る面影が
楽しかった日の想い出
君と一緒にすくった砂も
海のさえずりも
今では僕の心のそこに
永遠に消えない傷のあと

あいつ

富田秀隆（三年）

すなおなあいつ
さびしがり屋のあいつ
ふざけるあいつ
でもちょっぴり大人のあいつ

生意気なあいつ
自分の気持を見せないあいつ
タバコをすうあいつ
でも無邪気なあいつ

雷のきらいなあいつ
かっとすると何をするかわからぬあいつ
けんかの好きなあいつ
でも憶病なあいつ

言うことをきかないあいつ
寝ることの好きなあいつ
海に背を向けたバカなあいつ

でもやっぱりそんなあいつが好きなんだ。

工藤純一（三年）

雪は降るべき時に降る
耳をすましてごらん
聞こえるだろう宇宙の響きが
雪は宇宙のこすれあうきりくず
はるかに底抜けに明るい青空を
うずめつくした灼熱のきりくず
雪はそんなたえきれない程の輝きを
一ぱいにみたしている
耳をすましてごらん
一人一人の鼓動の中に生きている
雲じゃない魂なのだ
幾千万のこすれあい・輝くきりくずを
たえがたく呼吸と共にまきちらして
宇宙のはてしない深奥に
誇と共にかけ上ろうとしている
地を蹴り今や虚空に一の凝集した
若き魂として上昇しつづけるのだ
雪は降るべき時には降り
人は生きるべき時に生きる

短歌 俳句

灼熱の海

神川一正（一年）

さいはての　荒崎の海
　人知れず
ヨットのために　はるばると
荒崎の　ポニドの中の　海中に
　われ戯れて　突き落さる

荒崎で　婆娑恋しさに　衣笠へ
バスに揺られて　やっと着く

永山俊郎（二年）

夜の浜　聞りる沖に　語らうは
ヨットのこと　故郷のこと

南風（はえ）うけて　雄々しく立つや　白亜の舎
吾を誘（いざな）う　南の島へ

ふと会いぬ　黒き瞳に　たじろぎぬ
吾の心を　知らずしてか

小島孝行（三年）

早春の　北風さけて　コーキング
今日も風　セールまぶしい　炎天下
帆を染める　つるべ落としの　夕陽かな

木村順一（一年）

波をわり　我おもらゆは　白帆なり
飛沫あび走るヨットの　雄姿かな
我腕　シート持つ手に　死がにじむ

吉田一道（一年）

荒崎や　富士の姿に　黒潮よ
荒崎や　夕陽の沈む　太平洋
荒崎や　沖の白波　風の声

木村雅彰（一年）

合宿で　三度三度　メシを食う
スナイプや　バシッと決める　ジブシート
合宿所　起床の声で　目をさます

随筆

ヨット観

宮崎幸雄（二年）

大学に入り、ヨットをやり始めてからもうかれこれ二年が過ぎようとしている。そしてこの二年というものが私にどのような影響を与えたかを考えてみると、良きにつけ悪しきにつけ微少ではない。

私はこの二年間ではたして人間として進歩しているのか。

確かに無駄なことはなかった。でも昔高校生の頃考えていた程の進歩ではなかった。ヨットを通じて根性とか男らしさの片鱗を学びとることができた。そして強い筋力と健康も手に入れることができた。沢山の良い友人もできた。

しかし反面、学校で講義を受けるのを諦め、少ない小遣いから合宿費、その他を出すという犠牲も払ってきた。それで時として、ヨットを続けることに疑問を持つこともある。

コーチがよくおっしゃる言葉に、「読みを深くする」というのがある。私はまだまだ単純な人間で、その言葉を実践することはとてもできない。

でもヨットというスポーツを一生懸命やれば、「読みを深くする」という言葉を身につけることができるならヨットをやる必要もあるし、価値もある。

この言葉の実践は、社会に出てどんなにか役立つことだろう。こみ他にも、ヨットには将来役立つことがあると思う。

このように、多大の恩恵と、そして犠牲を生むヨットをやっていれば、自然に一回り大きな男に成長できるのではないだろうか。

愛について

川島佳峯（二年）

人間にとって大切なもの――それは愛である。愛こそは、未熟な人間を成長させ、充実、完成へと引き上げるべき唯一絶対のものであろう。

愛は感情でもなく、欲望でもなく、崇高なる理念であらねばならない。人間の有限性を無限の彼方へと導くもの、それは愛にある。

古来より幾多の人々により愛が語られ定義され、今日に至っている。だがそれは未だに言い尽せられないし、又これからも続けて語られることだろう何故ならば人間の存在自体、不可思議なものであり、その人間の内に秘めた心の最も微妙なる琴線の音色　それが愛なのだから。

愛は楽しいものではないという。少くとも安・楽な心情からは生まれ得ない。愛は厳しいものだ。少なくともそれにまつわる甘美な面よりもむしろ　苦悩、自己に対する険厳、打撃の方が幾層倍深いかもしれない。

愛はおよそ自己の放棄を激しく迫る。絶対的な他者への帰依、愛の対象への帰依を鋭く要求する。そこには自己は存在しうるはずはない。合一、合のみが至福なのだ。だからこそ、愛は辛いのだ。苦しいのだ。

人間にとって自己の放棄ほど困難なものはないのだから。時には　その人の存在すら否定してしまうのだから。愛することを知った瞬、人はあらたに生まれ変わる。それ迄の自己は消滅し苦悩と渾沌の中からやがて新しき自己を創造していく。

その人の人格を愛えないような愛はそもそも愛ではない。

これの未来、可能性、能力、そして自己の存在そのものを、賭して愛の対象に向かう姿が真の愛の姿であろう。

人生に於て自我を放擲し、ひたすら一事に献身する姿が果して愛以外に見られるであろうか。

愛だけがそれをなさしむ。しかも観喜さえもって。愛はは偉大であると同時に悲惨であるのだ。

おわり

〝天声人語〟

窪田秀隆（二年）

〝ヨットクラブはいかにあるべきか〟を一つのモチーフとして話を進めてみたいと思う。

ヨットは本来娯楽性と個人性を持つスポーツであるが、大学の部活動としてのヨットは、その様な個人的性格を持つものではなり、というのも学生スポーツの真の目的は集団的性格を持つ事であり、その中で個人的性格をいかんなく発揮するという事であるからです。従って我々はヨットマンである前にクラブ員でなくてはならない。

そこで大学クラブの目的はあくまでも勝つ事であり、参加する事ではないというイデアが成り立つ訳であるが、しかしイデオロギーの見地から言ってこの言葉には何かしらアナクロ的で前近代的な要素が見られる。何故ならばスポーツは結果ではなくその過程に意義があるものなのなのだからだ。しかし、大学クラブは何等かの目的がなくては存在し得ないものであり、クラブの歴史が古くなれば成る程このイデアは一つのエトスとして残るのはやむを得ないのである。

しかし、ヨットを他の陸上スポーツと同一視して良いのだろうか。ヨットには自然という力が介入して来る。従ってクラブそれ自体の目的が何んであれ、そこに自然の力が介入する場合そこにクラブの目的とのギャップが生じるはずである。

即ち、ヨットというスポーツそれ自体が要請する或る種の厳格性が存在するのである。それでは厳格性とは何んでや！　厳格性とは自然を知る事であるの一言である。

以上をまとめてみれば厳格性の収得者即ち、自然にあくまでも順応出来る能力を持つ者ならばそのアナクロ的なイデアに参加出来るという結論に達するといってもそれ飛躍ではあるまい。

従ってヨットマンかクラブ員かという二者択一をするよりも一日もはやくその厳格性を理解し、クラブの目的に向って暴進出来る者のみが良いヨットマンであり良いクラブ員と成り得るのである。

"おわり"

雑筆

ここに我々の合宿におけるある一日を、日誌の中から掲載してみましょう。

諸先輩たちの時代と比べてどうでしょうか。

合宿日誌より

某月某日　　曇り　南風 2~3 m/s

記 和田、黒川

5:30　起床（陸トレ、職員）
6:30　朝食（味のり、ふりかけ、みそ汁）¥390
7:30　乗艇
12:00　昼食（シチュー）¥590
1:00　乗艇
5:30　夕食（煮込み）¥520
6:00　ミーティング
9:30　消燈

配艇

(午前)	(スナイプ)	(午後)	
1516	小嶋、光山	1516	富田、光山
1374	富田、広田	1471	永山、阿部
1471	工藤、永山	1374	吉田、夏山
10671	吉田、五十嵐	10671	五十嵐、木村(雅)
	(ディンギー)		
1263	中野、神川	1263	宮崎、吉田
1171	長谷川、宮崎	1171	川島、木村(順)
1251	川島、笠井	1251	小林、吉野

午前中、微風の中　上マーク付近に強い潮がありマークに入れない ケースがあった。
微風での タッキングの しかたに注意して乗っていた。

食当日誌より

某月某日　朝　味付のり、ふりかけ、みそ汁
　　昼　ハンバーグ、キャベツ
　　夜　オムレツ、漬物

〔食当〕
光山、木村(幸)
黒川、笠井

おかずの作り方

煮物

れんこん	(なかったらいい)	or じゃがいも→ルでる
こんにゃく	3枚	
ピーマン	8個～10個	
ひき肉(豚)	300g	
油	60g	
人参	1本～2本	
玉ねぎ	4個～6個	

① れんこんは皮をむき、乱れ切り。こんにゃくは小さく切る。ピーマンは3cm角に、玉ねぎ、人参は薄く切る。

② ①をよく油でいためる。ひき肉をかえ色が変ったら、ピーマンを入れしょう油大さじ15杯で調味しいい煮込みにする

これまで誰も合宿へ来て腹をこわさないのだから人間の抵抗力の強さというものを痛感する次第であります。

編集後記

この度「かざみ」発刊というきわめて意義深い仕事に従事出来たことは喜ばしい事であった。
発刊にあたり種々の問題が生じ、それを編集部員一同が取り組解決していった事に非常なる意義を感じました。後記にあたり部員一同にとりきわめて残念な事は、O.Bの寄稿が少なかったという事でした。原稿は誤字訂正以外全てそのままのせたという事を御了承願います。
最後に、後輩、アルバイトの最中に協力をいただいた編集部員(2年)並びに寄稿して下さった部長、O.B、部員の方々に感謝し、また、第二刊はより以上のものである事を期待して編集後記とします。